<学術論文>

幼児の母親認知と他児に対する愛他的認知・愛他行動との関連性

上村　晶　　高田短期大学子ども学科
天岩静子　　信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：愛着，内的ワーキングモデル，母親認知，愛他的認知，愛他行動

1．問題の所在と本研究の目的

乳幼児期の子どもは，親との相互交渉を基盤とし，幼稚園・保育所へ入園後に他者との人間関係の幅を広げて様々な社会的行動を獲得していく。第一愛着対象者である親との相互交渉経験が乳幼児のその後の社会生活に影響を及ぼすという見解は，その多くが Bowlby（1969, 1973, 1980）による愛着理論に基づいている。Bowlby は「個人間の情愛的絆とそれを求める個人の傾向」を愛着と定義し，愛着対象との相互交渉によって個人の生涯における対人信頼感の型がある程度規定されることを示唆している。また，愛着経験が内在化された内的表象を内的ワーキングモデル（Internal Working Modal：以下 IWM）と定義づけ，愛着形成の基盤となることを提唱している。このモデルは，第一愛着対象者との具体的な相互交渉を通して，愛着対象への近接可能性および情緒的応答性などに関する主観的確信に基づく，自己と他者の関係性全般に関する一般化された表象を指している。そして，生後 6 ヶ月から 5 歳くらいまでの比較的早い段階で形成された表象は，その後は変動することなく安定性を増していくと考えられている（遠藤, 1992）。この IWM に基づいて考えると，乳幼児期の子どもは，第一愛着対象者を認知し表象として内在化した上で，新たに遭遇する他者の振る舞いを予測・解釈し，自分自身がどのように行動するかを考えながら，様々な対人関係に適応させると考えられる。近年の愛着研究も，IWM の観点から愛着関係を緻密に分析する必要性が提唱されるようになり，外的に捉えられる親子の相互作用から主観的側面を含めた親子の関係性に移行し始め，乳幼児期に限らず児童期・青年期に至るまでの幅広い世代を対象とした IWM が注目されている（高橋, 2004）。

この IWM 理論と幼児の社会的行動の関連については，従来の様々な研究によって裏付けられている。親との関係が安定している幼児は，調和的で応答的な交渉ができ（Park et al., 1989），友達と衝突した際に直接的な衝突を回避する傾向があり（利根川・首藤, 1997），他児に対する向社会的行動が多い（Kestenbaum et al., 1989）などの報告がなされている。逆に親と不安定な関係を持つ幼児は，仲間に対する攻撃的行動が多く（Booth Rose-Krasor et al.,1991），仲間から拒否され孤立する傾向も高く（La-Freniere et al., 1985），また集団場面での問題行動が多い（Suess et al., 1992）などの知見が見られる。しかし，これらは幼少期における愛着の質をストレンジシチュエーション法（Ainsworth et al., 1978）や愛着Q分類法

（近藤, 1992）で測定しており，愛着は乳児期に測定し社会的行動　については幼児期に測定するなど測定時期が異なっていることが多く，　IWM 理論に基づく愛着表象を立証することが難しいという課題が残る。

このような見解から，1980 年代後半以降，愛着研究は行動レベルから表象レベルに移行する傾向が見られ，Attachment Doll Play（山川，2006）や Attachment Story Completion Task（以下 ASCT：Cassidy, 1988, Bretherton et al., 1990, Vershuren et al., 1996）などの架空例話を用いた投影的手法による表象測定法が多く使用されるようになった。しかし，3 歳以降になると行動的近接などの目に見える愛着行動が次第に減少し, IWM による対象への主観的確信（愛着対象が誰であり，どこに存在し，愛着対象からどのような応答が期待できるかについての主体的な考え方）が中核をなすようになるという Bowlby（1969, 1973）の知見を考慮すると，これらの投影的手法では実際の親に対する認知を的確に反映しているとは言いがたい。戸田（1990）によると，子どもの行動に影響を与えるのは，外的な親の養育態度ではなく子ども自身が親の態度をどう受け止めているかという認知であり，子どもが親の愛情を認知することは, 自己や他者との関係において安定した表象と関連があること，また回避的な表象やアンビヴァレントな表象は，親の無関心さや思いやりに欠けるという認知と関連していることが見出されている。よって，幼児が親の養育態度をある種のモデルとして認知することで IWM が構築され，その後の社会的行動に影響をすると仮定した場合，幼児の実際の親に対する認知をより的確に測定することが重要であると考える。

このような，親の養育態度を含む幼児期の家庭環境や経験が大きな影響を与える具体的な社会的行動として，向社会的行動や愛他行動などが挙げられている。Mussen et al.（1980）によると，向社会的行動とは他者や集団を助けることや人に役立つことを目的とする行為を指しており，その動機として具体的な報酬や承認を期待する利己的なものと，他者の要求や相手への共感など報酬に左右されない利他的な動機の双方を含む，社会的望ましさに起因する幅広い行動であると定義されている。一方，愛他行動は向社会的行動の一部として内発的に動機づけられた利他的行動であり，外的報酬に規定されない自己犠牲度の高い行動であると定義されている。実際の親に対する認知的側面に焦点を当てた研究は数少ないが，Rutherford et al.（1968）は，最も寛大な愛他行動が見られた幼児は養育的で温かい親の態度を認知しており，親を寛大さのモデルとしていることを報告している。また，親への受容的･親和的な認知によって社交性や愛他性などのモデリングが生じやすいこと（森下, 1998），モデル（保育者）への受容的認知が愛他行動の出現を高めること（後浜, 1981; 森下, 1985）が報告されている。よって，主要な養育者に対する受容的認知は，対象への観察や注視を高め，その相互交渉における養育性を内在化させ，自身の愛他行動の形成を促すと考えられる。すなわち，この養育者に対する認知が愛他行動の形成に影響を及ぼすという知見は，親の養育性に対する認知的側面が，その後の社会的行動の発達に影響を及ぼすという IWM 理論に基づく見解であると考えられる。以上の知見を踏まえて，本研究では，幼児の社会的行動として最も自己犠牲度の高い愛他行動に着目し，親（特に母親）に対す

る認知と愛他行動との関連性を検討することにした。

しかし，本研究を実施する際に，前述の知見に基づき，以下の2つの課題が挙げられる。

第1に，幼児の日常生活に密着した実際の母親に対する認知について検討する必要がある。1点目として，母親への認知が社会的行動のモデルとなることを前提とした際，援助を必要とする困惑場面において実際の母親はどのように行動するかという，実際の親への認知的側面を検証する必要があるだろう。そこで，本研究では抽象的な幼児の名前を用いた架空例話ではなく，調査対象児本人が登場する例話を用いて課題教示を行うこととする。同時に，幼児の母親認知と同様に，母親に対しても自身の養育性に関する認知を調査し，双方の認知が一致した親子を抽出することで，より信頼度の高い実際の母親に対する幼児の認知を取り上げたいと考える。また，2点目として，幼児の母親認知は日々の状況に左右されやすいものであることを考慮する必要もある。つまり，援助性の高い状況（怪我・事故）では，援助の必要性や親としての義務が喚起されるため，幼児に対して受容的な援助をする可能性が高いと考えられるが，援助性の低い状況（失敗・要求）においては，母親の私的感情や養育観が反映すると推測される。よって，母親の援助必要性の高低を場面に組み込んだ上で課題を設定し，実際の母親に対する幼児の認知的側面を明らかにしたいと考える。

第2に，幼児の愛他性の測定についても検討する必要性がある。1点目として，愛他行動は「他者のために行動ができる」という自己認知に基づく意図的に制御された行動であり，IWM理論に即して捉えると，母親の受容的な養育性を認知した結果，他者のために行動できるという自己認知が成立すると言えよう。よって，幼児自身が他者に対する自身の行動をどのように認知しているかという認知的側面に焦点を当てて，幼児の愛他性に対する自己認知を検証することが不可欠であると考える。また，2点目として，他者が困惑する場面に遭遇した際には，相手の困惑度など様々な状況的な障壁（コスト）が重なると，自己犠牲の程度や自他の利益などにより幼児の心理に葛藤が生じ，愛他行動の出現は状況的要因によって規定されることを考慮する必要がある。さらに，たとえ幼児が困惑状況に伴う変動がなく全般的に一貫して愛他的であると自己認知していても，実際に愛他的な行動をするかは疑問である。従来の向社会的行動や愛他行動の自己認知に関する研究は，絵や物語を用いた例話法などが主流であり，幼児が社会的に望ましいと思われる概念に従った動機を述べたとしても，実際にその動機に基づいて行動するとは限らないと報告されている（Raviv et al., 1980）。そこで，場面における変動性及び架空と現実に関する変動性に配慮し，本研究では幼児の愛他性を測定する際に，心的負荷のかかる2つのコストとして「援助必要性の高低に伴うコスト」と「架空と現実のコスト」を設定し，状況に応じた認知の差異を測定すると同時に，認知的側面と同様の愛他行動を測定したいと考える。

以上の見解から，本研究では幼児期の親子関係と他者への愛他性との関連性について，IWM理論に基づいた認知的側面に着目し，幼児の母親認知・友達への愛他的認知・実際の愛他行動の3点の関係を明らかにすることを目的とする。また，状況的コストによる認知

と行動の差異（ずれ）にも着目し，友達への愛他的認知と実際の愛他行動との差異が母親認知とどのような関連があるかについても検討を行う。

2．研究方法

1）調査対象

N市内の保育園児の3歳以上児190人を対象に個別実験を実施し，また，147人の母親から質問紙調査の回答を得た。その上で，後述の幼児の母親認知タイプと母親の養育性タイプに関する母子の回答が一致した78名（54.1%）を，母親の養育行動を的確に認知している幼児として分析対象児に選んだ。

2）実験方法

幼児を対象とした実験は，全て保育園内の空き部屋で個別に実施した。質問の際には誘導的な質問を避けて，調査対象児の自由連想言語による反応を引き出すよう留意し，言動が曖昧であった場合には再質問をした。また，母親認知･愛他的認知に関する2課題の提示順序は，調査対象児の間でカウンターバランスをとった。調査対象児の反応は全てビデオカメラに収録し，後日ビデオ分析をした。

A）幼児の母親認知課題及び母親の養育性に関する質問紙

前述のBretherton et al.（1990）によるASCTを翻訳・活用した。このASCTはDoll Play法によって投影的に愛着表象を測定するものであり，こぼしたジュース・ひざの怪我・寝室のおばけ・親の旅行への出発・帰宅した親との再会の5場面から構成されている。本研究では，日常的な幼児の困惑状況が想定可能で援助性の高低が反映される2場面を抽出し，日本の家庭に適するストーリーに修正をした上で，①失敗場面（援助性低場面：おやつの時間に誤って牛乳をこぼしてしまう）と，②負傷場面（援助性高場面：公園の滑り台に一人で登ろうとして転んでひざを怪我した）を取り上げ，図版による例話課題として調査対象児に提示した。また，例話終了後には，母親の言動，母親の態度，母親の援助行動，困惑事態の終結の4項目について質問をした。

評定に際しては，Bretherton et al.（1990）の受容･拒否に関する判断基準（Table 1）に基づき，各場面の回答から，母親への受容的･拒否的認知を筆者が評定した。その後，母親認知課題の2場面を合わせて，両場面において受容的な態度で接すると認知しているHH群（受容的認知群），援助必要性の高低に依存した認知をしているLH群（状況依存群），両場面において拒否的な態度で接すると認知しているLL群（拒否的認知群）の3群に分類した。同様に，母親への質問紙調査では，幼児の母親認知課題と同じ①失敗場面，②負傷場面に関する例話を示し，母親の言動・行動・その後の援助行動に関して，自由記述による回答を求めた。また，各場面の回答をTable 1の判断基準によって受容的･拒否的な母親の養育性を評定し，両場面で受容的な援助をするHH群（受容的援助群），援助必要性の高低に依存するLH群（状況依存援助群），両場面で拒否的な援助をするLL群（拒否的援助群）の3群に分類した。以上の分類をクロス集計した結果，母子の回答が一致した78名の

幼児の内訳は，LL 群 6 名，LH 群 35 名，HH 群 37 名であった。

Table 1　各場面における判断基準（Bretherton et al.（1990）を翻訳・一部修正）

場面	受容的基準	拒否的基準
①失敗場面	・母親の怒りや注意が過度に表出されず，失敗を咎めない場合。 ・こぼれた牛乳を母親が拭く，もしくは母子で一緒に拭く場合。	・母親の怒りや注意が過度に表出され，失敗の罪を過剰に攻める場合。 ・こぼれた牛乳の掃除に全く関与しない，もしくは子どもに拭くことを強要する場合。
②負傷場面	・幼児の怪我の痛みに母親が反応した場合 （Ex. 薬を塗る・絆創膏を貼る・抱きしめる・すぐに近寄って確認するなど）	・幼児の怪我の痛みに全く反応しない場合 （Ex. 知らないふりをする・遠くで見ている・怒ってしまうなど）

B）友達への愛他的認知課題

幼児期における愛他行動の中で，最も強く自己犠牲が意識化される分与行動（Eisenberg et al., 1989）に着目し，調査対象児の日常生活に密着した愛他的認知課題を考案するために，保育現場における分与行動を事前観察した。その結果，全ての実験園で各園児が所有しているクレヨンの分与行動に関する愛他的認知課題を構成した。また，3 歳以上児が最も分与抵抗を示すことが多く，幼児の利己性・愛他性が純粋に反映されやすい状況的コストを取り入れ，①未使用玩具分与場面（コスト低場面：友達がクレヨンを紛失して困惑する場面において今自分が使っていないクレヨンを分与する）と，②使用中玩具分与場面（コスト高場面：現在の描画活動を中断して自己犠牲を払っても友達のために自分が今使っているクレヨンを分与する）の 2 場面を設定して調査対象児に提示した。また，例話終了後に，その後の分与に関する幼児の行動（分与認知）とその理由（分与動機）について質問をした。

Table 2　分与動機の判断基準（石橋（1992）を一部修正）

カテゴリー	典型的反応例
共感的志向	「クレヨンがなくなってかわいそうだから」「貸してもらえないとかわいそうだから」
承認的志向	「（自分が）優しいから」「（自分が）いい子だから」「先生が誉めてくれるから」
他者要求への関心	「（相手が）クレヨンないから」「貸してって言っているから」「困っているから」
自己損得への関心	「これから使うから」「（自分が）お絵描きできなくなるから」「今使っているから」
不明瞭	「わからない」「……（無回答・無反応）」

評定に際しては，調査対象児の言語的叙述を全てビデオ分析し，分与認知については，各場面の分与反応の有無（貸す・貸さない）を筆者が評定した。その結果，両場面で分与すると認知している愛他的分与群，状況的コストの高低に応じて分与が変動すると認知し

ているコスト依存群，両場面で分与しないと認知している非分与群の3群に分類した。また，分与動機については，4・5歳児対象の分与実験を実施した石橋（1992）の判断基準の4つのカテゴリーに加え，本研究が3歳児も対象としたことを考慮して「わからない」と回答したり無回答だった場合の「不明瞭」を含む5つのカテゴリーに分類した（Table 2）。

C）幼児の愛他行動測定

首藤（1985）の実験を一部修正して使用し，全ての例話課題終了後にお礼のプレゼントがあることを調査対象児に伝えた後，可哀想な子ども（悲哀児）の写真を提示して名前と悲哀的状況を簡潔に説明した。悲哀児の箱にシールを多く入れると実験者がシールの分与数だけ悲哀児にプレゼントをあげられること，もう一方の箱にシールを多く入れると実験のお礼に調査対象児にシールの分与数だけプレゼントをあげることを説明した。プレゼントの魅力を一定にすることで調査対象児の主観的操作が加わらないように統制し，具体的なプレゼントの中身は告げずに，分与数の配分は調査対象児の自己決定に委ねた。また，分与行動に大人の在・不在が影響を及ぼすという首藤（1985）の見解を踏まえて，調査対象児に対して，実験者は後ろを向いて次の実験準備をするため，調査対象児が分与行動を行う際にはその様子を見ていないこと，また分与終了後に実験者に声を掛けてもらうことを告げ，分与行動に対して実験者が影響を及ぼさないように配慮した。分与終了後には，分与数の配分に関する動機を質問した上で，お礼として全員一律のプレゼントを手渡した。プレゼントは，保育室まで隠して持って行き，すぐにかばんに入れること，家に帰ってから開封すること，他の友達には話さないことを約束し，他の調査対象児に影響を与えないように配慮した。

評定に際しては，ビデオ分析の結果から，分与数・分与時間・分与動機についてカテゴリー分類した。分与数については，シール4個のうち，悲哀児の方へ分与した分与数を得点とした（Range : 0-4）。また分与時間については，実験者が背を向けてからシールを分与箱に入れ終えるまでに費やした時間を秒単位で測定した。分与動機については，愛他的認知課題と同様の判断基準（Table 2）に基づいて，5つのカテゴリーに分類した。

3）倫理上の配慮

愛他行動実験では，分与数に応じてプレゼントの中身が変動するという条件を調査対象児に提示したが，架空の悲哀児を提示した実験であることを考慮し，実際には全員に同じ中身のプレゼントを配布するよう配慮した。また，本実験は一人当たり15分程度の時間を要する個別実験であったため，事前に調査協力園の園長と打ち合わせを行い，登園から朝の活動までの自由時間や午後の自由時間を有効に活用しながら数日に渡って個別に実施し，調査協力園の保育に支障のない範囲で実施した。

3．研究結果

1）幼児の母親認知と愛他行動の関連性の検討

愛他行動の分与数に関して，母親認知タイプを要因とする1要因3水準の分散分析を行

った結果（Table 3），母親認知タイプの効果が有意であり（$F(2,75)=6.32$，$p<.01$），LSD 法に基づく多重比較の結果，HH 群の平均分与数は LH 群・LL 群よりも有意に多いことが分かった（$Mse=2.59$，$p<.05$; Figure 1）。この母親認知タイプと分与数の関係をより詳細に検討するために，最低分与数 0 個と最高分与数 4 個の調査対象児を抽出して χ^2 検定をした結果，有意な関連が見られた（$\chi^2(8)=19.08$，$p<.05$）。残差分析の結果から HH 群の調査対象児は 4 個全てを分与する傾向があり（残差：3.621，$p<.01$），LH 群の調査対象児は 1 つも分与をしない傾向が見出された（残差：2.332，$p<.05$）。

Table 3　母親認知別の平均・標準偏差

母親認知	N	Mean	SD
LL 群	6	1.16	1.49
LH 群	35	1.42	1.55
HH 群	37	2.75	1.61

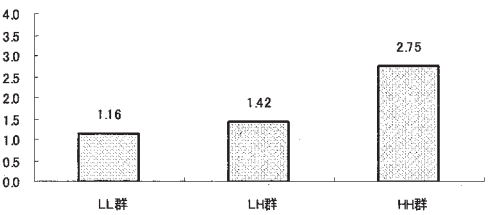

Figure 1　母親認知別の分与数

2）友達への愛他的認知タイプと実際の愛他行動との関連性

同様に，愛他行動の分与数に関して友達への愛他的認知タイプを要因とする 1 要因 3 水準の分散分析を行った結果（Table 4），愛他的認知タイプの効果が有意であり（$F(2,75)=4.04$，$p<.05$），LSD 法に基づく多重比較の結果，愛他的分与群の平均分与数は非分与群・コスト依存群よりも有意に多かった（$Mse=2.91$，$p<.05$; Figure 2）。しかし，各群の最低分与数 0 個と最高分与数 4 個の調査対象児の人数を比較して愛他的認知と愛他行動のずれを検討した結果，非分与群・コスト依存群においては分与数 0 個が多く認知と行動のずれはなく一致していた（$CR=2.19$&1.89，$p<.05$）が，愛他的分与群においては有意な差が見られず人数が分散していた。よって，たとえ愛他的分与ができると認知していても，実際の愛他行動で数多く分与する利他的な調査対象児と，全く分与しない利己的な調査対象児に分かれることが見出された。（$CR=1.07$，ns）。

Table 4　愛他的認知別の平均・標準偏差

愛他的認知	N	Mean	SD
非分与群	4	0.50	0.86
コスト依存群	29	1.68	1.70
愛他的分与群	45	2.53	1.70

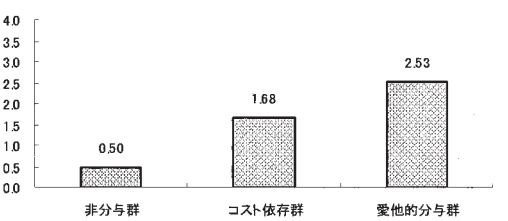

Figure2　愛他的認知別の分与数

3）母親認知・友達への愛他的認知・愛他行動の関連性

以上の結果から，母親認知においては HH 群が LH 群より分与数が多かったこと，また友達への愛他的認知においては愛他的分与群がコスト依存群より分与数が多かったことが見出された。よって，この 2 つの認知タイプのどちらが愛他行動の分与数に影響を及ぼしているかを検討するため，LL 群と非分与群を除いた残りの 4 群に焦点を絞り，愛他行動の

分与数に関して，母親認知（2）×友達への愛他的認知（2）の分散分析を実施した（Table 5）。その結果（調和平均：16.40），母親認知タイプの主効果が有意であり（$F(2,64)=18.73$, $p<.01$），同時に愛他的認知タイプの主効果が有意傾向であった（$F(2,64)=3.90$, $p<.10$）。愛他行動における平均分与数を認知タイプ別で比較すると，コスト依存群よりも愛他的分与群の方が多いこと，LH群よりもHH群の方がさらに多いことが見出された（Figure 3）。つまり，実際の愛他行動に関しては愛他的認知タイプよりも母親認知タイプとの関連が強く，母親が一貫して受容的な態度で接すると認知している幼児は，援助性の高低によって態度が変動すると認知している幼児に比べて，愛他行動における分与数が多いことが見出された。

Table 5　LH・HH群×コスト依存群・愛他的分与群の平均及び標準偏差

母親認知	LH群		HH群	
愛他的認知	コスト依存群	愛他的分与群	コスト依存群	愛他的分与群
N	15	19	13	21
Mean	0.80	1.89	2.76	3.14
SD	1.16	1.68	1.67	1.28

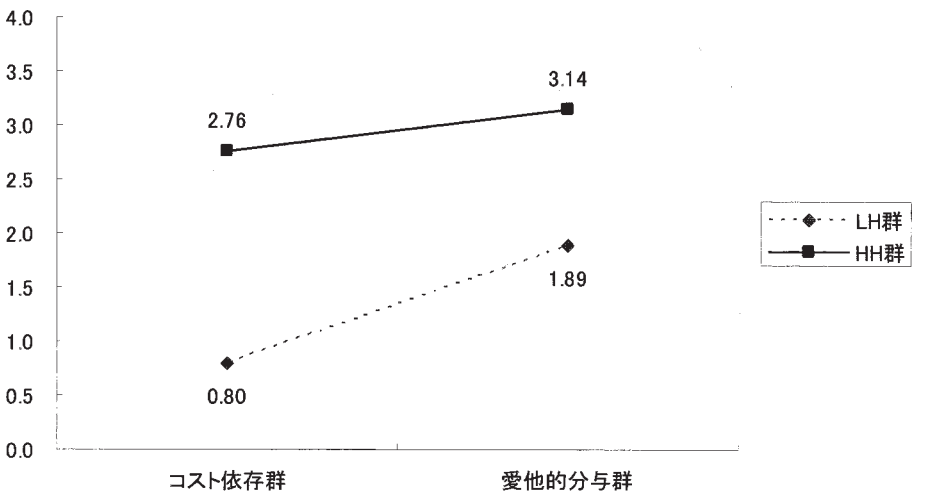

Figure 3　LH・HH群×コスト依存・愛他的分与群の平均分与数

また，各群における分与時間・分与動機を検討した結果，次のような傾向が見出された。まず，HH群に着目すると（Table 6），HH群×愛他的分与群は，平均15秒以内に共感的志向に動機づけられて4個全てを分与する判断を下す調査対象児が多かったが，HH群×コスト依存群は平均20秒近く費やして，共感的志向・他者の要求への関心に動機づけられて4個全てを分与する調査対象児が多かった。また，LH群に着目すると（Table 7），LH群×愛他的分与群は，平均分与時間に大差は見られなかったが，分与数が0個と4個に分かれ

る傾向があり，分与数 0 個の調査対象児は自己の損得への関心に，4 個の調査対象児は共感的志向・他者の要求への関心に動機づけられていた。同様に，LH 群×コスト依存群は，15 秒以内に自己の損得への関心に動機づけられて 1 つも分与しないという分与判断を下す傾向が見出された。

これらの結果から，愛他的認知と愛他行動にずれが生じた調査対象児の多くは 15 秒以上の分与時間を費やして分与数を考える一方，ずれの生じなかった調査対象児の多くは 15 秒以内に即断して分与する傾向が見出された。

Table 6　HH 群における愛他的分与群・コスト依存群の人数・平均分与時間・分与動機の内訳

分与認知群	分与数	人数	平均分与時間	分与動機（内訳：人数）				
				共感的志向	承認的志向	他者関心	自己関心	不明瞭
愛他的分与群	0 個	3	37.3 秒	0	0	0	2	1
	4 個	14	12.8 秒	12	1	1	0	0
コスト依存群	0 個	3	19.6 秒	0	0	0	3	0
	4 個	8	19.1 秒	5	0	3	0	0

Table 7　LH 群における愛他的分与群・コスト依存群の人数・平均分与時間・分与動機の内訳

分与認知群	分与数	人数	平均分与時間	分与動機（内訳：人数）				
				共感的志向	承認的志向	他者関心	自己関心	不明瞭
愛他的分与群	0 個	7	19.7 秒	0	0	0	6	1
	4 個	6	17.2 秒	3	1	2	0	0
コスト依存群	0 個	9	13.7 秒	0	0	0	8	1
	4 個	1	16.0 秒	1	0	0	0	0

4．総合的考察と今後の課題

以上の結果から，母親の一貫した受容的態度を認知している幼児は，友達へ愛他的分与ができると認知し，かつ実際の愛他行動も分与数が高いという本研究の仮説を一部立証することができた。すなわち，愛他的認知と愛他行動にずれがなく自己の愛他性を認知した上で行動できる幼児の背景には，母親に対する一貫した受容的認知との関連性があるという Bowlby の IWM 理論を支持する結果が得られた。この見解を裏付ける知見として，Yarrow et al.（1973）は，一貫して受容的な態度で接する養育者をモデリングした幼児は，実験終了後もその援助行動が持続したことを見出し，「愛他行動の発達を促す最適条件とは，大人が常に愛他行動を現すような生活環境の中で幼児が育つことである」と示唆している。本研究結果に基づくと，一貫して受容的な母親の態度をモデルとして認知している幼児は，母親の受容的な養育性を認知することで，他者の困惑場面においても状況的コストに左右

されない愛他行動を出現させることにつながると言えるだろう。

一方，援助性の高低に応じて態度が変容する母親をモデルとして認知している幼児は，「助けるか否かは状況に依存している」という状況依存型の母親の行動を内在化させ，負荷が高い場面に直面した場合は，その損得計算により愛他行動が抑制されると考えられる。この見解に関しては，母親の養育態度が状況に応じて一貫性を欠くことによって愛他行動が抑制されたのか，あるいはそのような養育態度の一貫性に欠ける母親を持つ幼児がコストに直面した際に利己的判断に偏りやすいのかという点については明らかにすることができない。しかし，前述の Yarrow et al.（1973）の知見に立ち返ると，状況に応じて態度が変わる意味を幼児が認識していない場合，この状況依存型の養育性は，愛他行動の発達や愛他動機の活性化を抑制し，幼児の愛他的判断を戸惑わせることにつながると考えられる。

本研究における最も興味深い知見として，母親の一貫した受容的態度を認知している幼児は，認知・行動両側面において他者志向型動機に基づいた愛他的分与判断を下していたことが判明した。その一方で，母親が援助性の高低に応じて態度が変動すると認知している幼児は，他者志向型動機に基づいて愛他的分与ができると認知しているにも関わらず，実際の愛他行動は自己焦点型動機に基づいて抑制されることが見出された。愛他的認知と愛他行動におけるずれの生起に，母親の養育性との関連が見られたのはなぜだろうか。

母親の一貫性がある受容的な態度を認知している幼児が愛他行動の出現が多かったという本研究結果は，最も安定して受容的なモデルの姿を認知している幼児は，愛他行動のモデリングがより促進されたという後浜（1981）の知見を支持するものであったと言える。本研究では母親の養育態度をモデルとして直接測定していないため，先行研究ほどの信頼性は得られないが，母子の認知タイプが相互に一致している調査対象児を抽出したことから，幼児が母親の養育性を的確に認知していることを前提とした結果であることを強調しておきたい。また，本研究において最も強く示唆できることは，幼児の母親認知が，認知的側面及び行動的側面において一貫した愛他性と関連していたことである。これは，愛他行動が現実レベルにまで出現するためには，一貫性のある受容的な母親の態度に対する認知が，愛他性に関する認知・行動両側面と結びついたと言える。すなわち，状況に関わらず母親は常に受容的態度で接すると認知している幼児は，認知レベルにおいて「自己犠牲を払っても分与することができる」と自己の愛他性を認知しており，実際の行動レベルにおいても認知と一貫した愛他行動が出現すると言えよう。その一方で，母親が状況に応じて態度が変動すると認知している幼児は，愛他的認知と愛他行動との間にずれが生じていたことから，状況に依存する母親認知と愛他的認知・愛他行動のずれの生起の関連には，母親の養育性が一貫性を欠いている状況を幼児がどのように認知しているかに起因すると考えられる。

上述の２つの母親認知タイプに着眼すると，その違いは母親認知課題の失敗場面における母親の養育性を，受容的と認知するか拒否的と認知するかの差異である。この失敗場面では援助性が低いために，母親の私的感情や発達期待・しつけなどが養育態度の変容へ影

響を与えやすいことが考えられる。すなわち，援助性の低い状況だからこそ母親の発達期待が“しつけ”という方略で現れて母親の態度を変容させやすくしており，その変動する様子を幼児は認知していると考えられる。しかし，母親の態度が変わる理由を的確に理解していない幼児は，「このような失敗は許されない」・「このような状況なら助けてくれる」というように，明確な根拠がなくただ外発的な強化のみによって自己の行動を規定づけるのではないだろうか。“しつけ”に基づく母親の養育態度は，「わざとではないが失敗してしまった」という失敗事象において，幼児の自責の念に対する共感度を低め，外発的に幼児の行動を制御し，幼児には非を咎める母親の姿として認知される。しかし，他の方略でしつけをしている母親は，幼児の失敗に対する共感度を低めることなく態度に反映させるため，幼児は威圧的でない対応を示す母親の姿を認知するに至るであろう。これらのことから，認知・行動の両側面におけるずれの生起を左右するような母親の養育性は，発達期待やしつけから生じる“共感性の程度”によって規定づけられていると考えられる。

この点を解明する見解として，Hoffman（1975）は力中心的しつけと誘導的しつけという2種類のしつけの差異に着眼し，力中心的しつけよりも誘導的なしつけが愛他行動を促進することを示唆した上で，その根拠として共感の機能を重視している。つまり，母親が説得が行き届いた誘導的なしつけをしている場合は，幼児の視点を他に焦点化させることで自己への関心を低める。そして，他者の苦痛に対しても幼児の共感に基づいた内発的動機づけをもたらすことにつながり，共感の機能が喚起されやすくなる。しかし，母親が権力や道徳的規律で無理に教え込む力中心のしつけをしている場合は，幼児の視点をしつけ方略を用いる大人に焦点化させたり大人の罰や承認などの強化に敏感にさせたりする。そのため，罰や承認など外発的動機づけをもたらし，共感の機能が喚起されにくい状況に陥るという見解を示している。また，中里（1985）は，愛他行動の行動・認知・情緒の各側面は，愛他行動における他者志向型動機の活性化に由来することを指摘し，生後1〜2歳において主に母親との情緒的つながりを通して共感性が活性化され，この共感性の喚起がその後の愛他行動の発達における基盤となること，2〜6歳頃に共感性により喚起された動機が発達し，これらの動機に基づき愛他行動が生起されることなどの見解を示している。

以上の知見に基づくと，このようなしつけ方略や母親の養育態度の一貫性は，幼児の共感性の程度と発達に影響を及ぼしており，一貫して受容的な母親の姿をモデルとして認知している幼児は，内発的な共感的情動が喚起されやすい養育を受けていることが想定される。すなわち，援助の必要性に関わらず母親が誘導的なしつけによって共感的態度で接し，その態度が揺るぎないものであるほど，幼児は母親の共感的態度をモデルとして認知すると考えられる。その結果，他者が困惑している状況下において情動的共感が強く喚起されやすく，他者焦点型の強い動機に基づいた愛他的認知・愛他行動へ至ると考えられる。一方，援助性の高低に伴う状況に応じて態度が変動する母親を認知している幼児は，発達期待によるしつけ方略によって態度が変動するという母親の姿をモデルとして認知すると考えられる。その結果，他者が困惑している状況下では，たとえ共感が喚起されたとしても，現

実場面における外発的な実質的損失感の喚起に伴い共感の程度が弱まるため，その後の愛他行動が抑制され，愛他的認知と愛他行動の間にずれが生じたと推測できる。

このような見解は，先行研究における知見と本研究における調査対象児の共感的志向による分与動機の反応から推測されるものであるため，具体的な確証はない。しかし，一貫して受容的な母親の態度を認知して愛他行動に至った調査対象児は「共感的志向」に動機づけられており，状況依存型の母親の態度を認知して愛他行動が抑制された調査対象児は「自己の損得に関する感情」に動機づけられていたことから，この両タイプにおける共感の喚起度に差異が生じていることは推定できる。この結果を踏まえると，行動レベルにおける愛他行動の形成には，母親の養育性に対する幼児の認知だけでなく，母親の受容的態度によって発達する“共感性の程度”が重要な鍵を握っていると考えられる。

しかし，共感性の程度以外の観点からも考慮すべき点がある。まず，調査対象児の年齢に応じた母親の発達期待が考えられる。例えば，幼児の年齢が高くなるほど，自分の失敗は自分で処理することを求める母親側の発達期待が高まることも想定されるだろう。幼児の年齢に応じて母親の養育態度が変容するならば，幼児が場面の状況や援助性の高低に依存した認知を示すことも考えられる。本研究では母親の年齢に応じた発達期待やしつけ方略などは調査していないが，母子間における認知の一致率が 54.1%であったことを踏まえると，幼児の母親認知と母親自身の養育性に対する認知との間には，その援助の背景にある発達期待やしつけ方略に応じて差異が生じる可能性があると推測される。この点を考慮した上で，幼児の母親認知を再考する必要があるだろう。

また，幼児の年齢に応じて愛他性の獲得が変容する社会的要因が考えられる。池上・丹下（2008）によると，愛着タイプの影響は，年中児以降になると保育者や仲間との触れ合いなど人と共在した文化の上で，親を超えた他者との愛着成立を可能とすることを示唆している。幼児の年齢が高くなるにつれて園生活における生活経験が長くなり，保育者によって他児との関わり方について指導を受けていることを想定すると，年齢が高いほど母親認知とは独立した愛他的認知・愛他行動が出現する可能性も一考すべきであると考える。

今後は，幼児の年齢に応じた共感性の程度や母親の発達期待・保育経験に関する調査を通して，共感性の高低やしつけに関する養育観などを視野に入れた上で，他者への愛他性を検討する必要があると考える。また，IWM 理論を再考する上で，愛着表象の形成プロセスや規定因など，認知心理学的アプローチから IWM のメカニズムについて解明していくことも必要であろう。その上で，第一愛着対象者との IWM は様々な経験を超えて機能するということを，立証していく必要性があると考えている。

5．引用文献

Ainsworth, M., Blehar, M., Waters, E. & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation.* Lawrence Erlbaum Associates.

後浜恭子．(1981)．モデルとの養育関係の認知が幼児の愛他行動の模倣におよぼす影響．

大阪市立大学生活科学部紀要，29，271-279.

Booth, C., Rose-Krasor, L. & Rubin, K. (1991). Relating preschoolers' social competence and their mothers' parenting behaviors to early attachment security and high-risk status. *Journal of Social and Personal Relationships*, 8, 363-382.

Bowlby, J. 著　黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳．(1990)．母子関係の理論Ⅰ．岩崎学術出版社

Bowlby, J. 著　黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳．(1991)．母子関係の理論Ⅱ．岩崎学術出版社

Bowlby, J. 著　黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳．(1992)．母子関係の理論Ⅲ．岩崎学術出版社

Bretheron, I., Ridgeway, D. & Cassidy, J. (1990). Assessing internal working models of the attachment relationship: An attachment story completion task for 3-year-olds. *Attachment in the Preschool Years.* University of Chicago Press. 273-308.

Cassidy, J. (1988). Child-mother attachment and the self in six-year-olds. *Child Development,* 59, 121-134.

Eisenberg, N. & Mussen, P. (1989). *The roots of prosocial behavior in children.* Cambridge University Press.（菊地章夫・二宮克美（訳）．(1991)．思いやり行動の発達心理．金子書房.）

遠藤利彦．(1992)．愛着と表象 ―愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観―．心理学評論，35(2)，201-234.

Hoffman, M. (1975). Altruistic behavior and parent-child relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31(5), 937-947.

池上貴美子・丹下祐子．(2008)．幼児の表象理解と愛着との関連について．金沢大学教育学部紀要，57，57-69.

石橋尚子．(1992)．幼児の分与判断と分与行動に及ぼす動機の効果．教育心理学研究，62(6)，342-349.

Kestenbaum, R. Farber, E. & Sroufe, L. (1989). Individual difference in empathy among preschoolers：Relation to attachment history. *New Directions for Child Development*, 44, 61-64.

近藤清美．(1993)．乳幼児におけるアッタチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定．発達心理学研究，4(2)，108-116.

La-Freniere, P. & Sroufe, L. (1985). Profiles of peer competence in the preschool：Interrelations between measures, influences of social ecology, and attachment history. *Child Development*, 59, 135-146.

森下正康．(1998)．幼児期の母子関係が子どもの思いやりにおよぼす影響．和歌山大学教育学部紀要，48，1-13.

森下正康．(1985)．幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング　―教師モデルに関する受容的・拒否的態度の認知の影響―．教育心理学研究．56，138-145.

Mussen, P. & Eisenberg, N. (1977). *Roots of caring, sharing and helping : The development of prosocial behavior in children,* Freeman.（菊地章夫（訳）. (1980). 思いやりの発達心理. 金子書房）

中里至正. (1985). 道徳的行動の心理学. 有斐閣選書, 108-218.

Park, K. & Waters, E. (1989). Security of attachment and preschool friendships. *Child Development*, 60(4), 1076-1081.

Raviv, A., Bar-Tal, D. & Lewis-Levin, T. (1980). Motivations for domination by boys of three different age. *Child Development*, 51, 610-613.

Rutherford, E. & Mussen, P. (1968). Generosity in nursery school boys. *Child Development*, 39, 755-765.

Suess, G., Grossmann, K. & Sroufe, L. (1992). Effects of infant attachment to mother and father on quality of adaptation in preschool : From dyadic to individual organization of self. *International Journal of Behavior Development*, 15(1), 43-65.

首藤敏元. (1985). 幼児の愛他行動に及ぼす理由付けの効果. *教育心理学研究*, 33, 243-247.

高橋由利子. (2004). 愛着理論とその測定方法　―最近の文献研究より―. 目白大学人間社会学部紀要, 4, 53-66.

戸田弘二. (1990). 親の養育態度の認知と Internal Working Model との関連. 北海道教育大学紀要, 41(1), 91-99.

利根川智子・首藤敏元. (1997). 幼児の愛着表象と社会的問題解決との関係. 埼玉大学教育学部紀要, 46, 1-16.

Vershuren, K., Marcone, A. & Scoefs, V. (1996). The internal working model of the self, attachment, and competence in five- year- olds. *Child Development*, 67, 2493-2511.

山川賀世子. (2006). 幼児の愛着の測定　―Attachment Doll Play の妥当性の検討―. 教育心理学研究, 54, 476-486.

Yarrow, M., Scott, P. & Waxler,C. (1973). Learning concern for others. *Developmental Psychology*, 8, 240-260.

（2009年12月17日　受付）
（2010年４月21日　受理）